

# 23/7

TWENTY THREE SEVEN

四時 侵食と絶望の王



NOVELIZE

氷上慧一

ILLUST

凧良

ウルに引きずられるようにして、ヒカリ達は品川周辺から移動していた。彼女が言うにはバース4の軍勢に対し反撃に出るということだが、何をするかは教えてもらえない。

ただ大人しくついてきて下さいの一点張りだ。そんなわけで、ヒカリは完全にウルが付属物としてわけもわからず移動を続けていた。

しかし、当然のことながらJRや地下鉄をはじめとする公共交通機関は早々に麻痺しており、街の日常は呆れるほど簡単に非日常へと取って代わられた。

人々は、なんの説明もされないまま、目の前に突如として現れたモンスター

に対して恐慌状態を引き起こして逃げ惑う。

街の至る所で無数のパニックが起こっていた。

「走って下さい。今は他人のことを心配していられるような状況ではありません」

「わ、わかっているよ！」

ヒカリは反射的にそう答えながら走る。

人々の恐怖を煽っているのは、どこからともなく溢れ出したモンスターの数々のみではない。

走ることに集中しろと言われたものの、思わずヒカリは視線を上げる。

見たのは進行方向の先にあるビルだ。

ごく普通の、窓の表面がミラー加工されたどこにでもある建物だった。

その屋上、おそらくはヘリポートか何かを備えた場所だったのだろうそこから、虹色の不可思議な光が生じている。

日光が窓などに反射するさい屈折して生じるプリズム光ではない。そもそも今は夜なので、プリズム光が生じるはずもなかった。

虹色の光は、いつまでもその場にとどまらず広がりながら移動する。ヒカリが最初に連想したのは煙草だった。

火は煙草全体を燃やすのではなく、発火点は徐々に根元に向かって移動する。それと同じように、光はビルのまだ通過していない場所を選んで下へ下へと進んでいく。そして虹色の光が通り過ぎた後、そこには元のビルとは似ても似つかぬ物体が姿を見せていた。

西洋の城のような建物だったり、機械を組み合わせた装甲板であったり、はたまた見たこともないような植物の根だったり、まったく統一性もなく混沌とした状態に東京の街が上書きされ、作り替えられているようだ。

原因は、あの虹色の光なのだろう。虹色の光を境として元のビルが別の建物に挿げ替えられているようだった。

「あれが、世界を侵食するということ」

ヒカリは走りながら見ていたのだが、その後ろから苦もなく付いてくるウルは冷静にそんな説明を加えた。

おそらく、後ろからヒカリの視線がどこに向けられているのかを察したのだろう。

「侵食？」

「ええ、クロノゲートは単に異なるバース間を行き来できるだけではなく、強制的に二つの空間を繋げてしまう機能を持っています」

つまり、あの奇妙な建造物はこの世界のものではなく、攻め込んできたという、バース4のものなのだろう。

「文字通り侵略戦争ということなのか……」

モンスターの攻撃だけではなく、自分達の世界が書き換えられていく。理屈はわからずとも、その現象を見せられ人々はより混乱の度合いを深めていく。

なにしろ、正体不明のモンスターから逃げようとすれば、その逃げようとする地面そのものが刻々と正体不明の場所に書き換わっていくのだ。

この状況がどこかからやってきたのか、自分達が迷い込んでいるのか、それすら判断がつかなくなっているのかもしれない。

「ヒカリ、敵の群れがこっちに來ます」

「わ、わかってる！」

敵に見つからないようにビルとビルの中の裏道を通ってきたが、完全に安全地帯とはいかないようだ。

追ってきていたのは、先ほども襲いかかってきていた犬型のモンスター。「ガラム」という名前であるらしい。

ウルという言葉は、戦うか逃げるか迂回するかを選択しろということだろうが、ヒカリは即座に、目立つのを覚悟で戦うことを選んでいった。

何故ならガラムの群れはヒカリ達の存在に気づいてこのような裏道に入り

込んできたわけではなく、小学生ぐらいの子供に襲いかかろうとしていたからだ。

「くっ！」

ヒカリは左手にはめた腕時計に右手を伸ばし、休止状態だったクロノギアを展開する。一瞬の発光と同時に、ヒカリの利き手側——つまり左半身は防具で覆われ、その手にはレイピア状の武器が握られていた。



「せいっ！」

体ごと相手にぶつかっていくようにして突きを放つ。

手にしたレイピアはヒカリの体や力の入れ方を考慮して作ったオーダーメイド品のように手に馴染み、突きの威力を敵に叩き込む。

「早く逃げるんだっ！」

今にも失神しそうなほど青白い顔をしていた子供達が返事とも悲鳴とも取れぬ息を漏らしてヒカリが指し示した方へと走り去った。

それを確認してからヒカリは動き出す。

帰宅した瞬間に襲われた時の醜態が嘘のように、たった一撃でガルムを絶命させる。体はほとんど勝手に動き、ウルが動く前に、他の三頭のガルムも一人で片付けてしまっていた。

「僕が、これを……」

突きの勢いでビルの壁に叩きつけられ動かなくなったガルムを見て、ヒカリ

は呆然とつぶやいていた。

成人と同じほどの体格を誇る生物を、動けなくなるような勢いでビルに叩きつけるような芸当は普通の人間の力では到底不可能なのだ。

「それがクロノギアの力です」

ここに来るまでの間に、走りながらではあったが口頭で説明されていた。手にした者の身体能力を劇的に高め、さらには時間や空間に関係した特殊な能力を与えてくれる、言ってみれば神器。

この驚異的な力だけではなく、仁が持っていたクロノギアは特殊能力——クロックアーツ《インビンシブル77》として七七秒間、敵からのありとあらゆる攻撃を防ぐことができるらしい。

今の所、強化される身体能力だけでお釣りが来るため、ヒカリがその恩恵を感じることはなかったのだが。

ただ、不思議なのはウルである。

今の戦闘中、彼女はヒカリの戦いぶりを見ていてだけで、自分では一步も動こうとはしなかった。

いくらクロノギアによってヒカリの身体能力が跳ね上がっているとはいえ、契約者として同じように強化されている、しかもその能力を使い慣れているウルが割って入れないほどの動きを見せたとも思えない。

彼女の性格からしてクロツカーズを守る契約者としての役目を放り出すとも思えないのだが……。

「な、なんだよ……、子供を助けたことに文句があるの？」

決してポーカーフェイスを崩さないウルが何を考えているのかはまるでわからない。クロノゲートの破壊以外には興味がないという様子だったこと、戦わずに大人しくしていると言われていたことなどから考え、余計な戦闘は無駄だとばかり小言を言われるのだと思った。

ヒカリ自身も、自分の行動に戸惑っていた。

遺体を見たわけではないとは言え、父親が命を落とした直後である。普通ならもっと取り乱しているか、呆然と立ち尽くして動けなくなるものではないのかと自問したりもする。

子供とはいえ、他人の危機を見て助けに入る自分の行動が酷く冷静に——そして冷たいもののように思えたのだ。

「いえ、ちょうどいい慣熟訓練になります」

「——は？」

「ですから、慣熟訓練です。あなたにはクロノギアを使いこなしてもらわなければなりません」

ある意味、人助けを無駄だと断じられるよりも理解不能の反応に、ヒカリは絶句していた。驚きのあまり、自分への疑念までどこかに吹き飛んでしまう。

そんなヒカリの様子にはまるで構わず、ウルは蕩々と語り出した。

「クロックアーツの攻撃無効時間である七七秒が過ぎると、一転してクロノギ

アは冷却時間に入り、あなたは完全な無防備になってしまう。そこで、クロノギアの出力調整を行うモードを使いこなしてもらわなければなりません」

クロックアーツが使えない間は極端に弱体化してしまう装着者を守るため、力をあえて偏らせることで速度や守りなど、局面局面に必要な能力のみを取捨選択して高める機能がクロノギアには備わっているのだと言う。

例えば、簡易的な障壁を展開させて、一定のダメージを相殺するには【シールド】というモードを使う必要がある。しかし、機械のスイッチを入れるように物理的な操作があるわけではなく、全てはヒカリの精神の内側で行わなければならない。

「簡単です。頭の中に架空のゲージとスイッチを創造し、これを切り替えるイメージを構築しておくのです」

よくスポーツで言われるマインドセットのようなものだろうか。

掛け声や、決まった動作を繰り返すルーチンなど、自分の体を自然とその状

態に持つていく刷り込みのようなものはスポーツでよく行われている。

要はそれと同じなのだろうが、スイッチで操作すればすぐに作動するような仕組みではないだけに使いこなすには慣れが必要だ。

「ですから、その慣熟訓練になります」

「あの、大人しく隠れて見ていろとか言つてなかったっけ？」

「ええ、肝心のバース4の幹部とやり合う時には隠れていて下さい。ですが、クロノギアを使いこなせていれば、何か危険なことがあっても対処できるようになります。ですから慣熟訓練は肝要です」

つまり、ウルはクロノゲート破壊と同時にヒカリの安全を保証する義務も負つており、後者のためにヒカリ自身が戦えるようになるのは大切だということだ。

なんとも乱暴な主張である。

「いや、だから、子供を助けるとか……、そういう、行動の意味みたいなものが

あるでしょう?」

「それはわかっています、この場だけを凌いだところで安全というには程遠いでしよう。もしかすれば曲がり角を二つ三つ曲がった先で再びモンスターと出くわすかもしれない」

正論すぎる正論を突きつけられ、ヒカリは黙り込む。

確かに、親元なり、避難所なり、そういったところまで送り届けて初めて助けたと言えるかもしれない。いや、それらの場所ですら現状では安全とはいえないのだ。

目の前に見えることにしか干渉できない。

その範囲の外があるとわかっているとしても、なにもできない。

それでも動かないよりは、見捨てるよりは、見過ごすよりはずっといいはずだ。そう信じたかった。

「……幸い彼らが逃げ去った方向は、私達が数を減らして来たあたりですから、

さらなる不運に見舞われる可能性は低いでしょう」

顔は相変わらず無表情のままだが、その言葉は少しだけ優しいものが混じっているような気がした。

「何より、先ほどの戦闘に気づいた敵が近づいて来ます。結果、我々が囨になっ  
ているようなものです」

不満があるのか、評価しているのか、相変わらずわかりづらい。

少なくとも、ウルが身構えているということは、ヒカリ一人に任せられない  
相手がやって来たということだろう。

そのことに気づき、遅ればせながら身構えた視界の先、一ブロック先の曲が  
り角から新たな敵が姿を見せた。

「来ます」

無駄だなんだと貶されないのであれば、こっちも好きにやってやるとヒカリ  
は妙な吹っ切り方をして新手に対して身構える。

しかしこの新手は、それまでの群れとは異なる点が一つだけあった。

「なっ——!?!」

ヒカリの声ではない。

むろん、ウルの声でもない。

驚きの声を漏らしたのは、まだあどけなさを残している少女だった。モンスタ―達を率いる少女——それは、ブリュンヒルデと共に現れ仁を足止めしていた、カリカと呼ばれた少女である。

「お前は！」

「あんた、あいつの息子！　なんでこんな所に!?!」

最初、逃げ回っている足取りを追われたのかと思ったのだが、どうやら偶然の遭遇であるらしい。

「い、生きていたのね！」

この広い東京で鉢合わせるなど、どんな偶然だと思わず舌打ちしたくなる。

しかもこの口ぶりからすれば、ブリュンヒルデ達はヒカリが死んだと思っていたようだ。

「確かに、クロッカーズやクロノギアが健在だと知っているにしては、追っ手の数が中途半端だとは思っていました」

ウルが、敵を前にしてもまるで慌てずにそう告げる。

だがヒカリの方はとても冷静ではいられなかった。

「お前が、お前達がつー！」

ヒカリ達を庇った仁の姿がフラッシュバックする。気づいた時にはクロノギアを展開させて斬りかかっていた。

「もう、いきなりなにをするのよ！ お前達、やりなさい！」

初撃は力みすぎたのか空を切った。カリカは距離を取りながら、モンスターをけしかけて来る。

ヒカリは、怯まなかった。

つい数時間前までただの男子高校生でしかなかったというのに、普通であれば恐怖心にすくんで動けなくなるような場面で、ヒカリはむしろ前に踏み出した。

今度の敵はガルムとは違う。身長はヒカリとほぼ同じ程度だが、人と言うには全身のバランスが酷く歪（いびつ）で、短い脚に異様に発達した腕を持ち、首の後ろあたりの筋肉が大きく盛り上がっているせいで余計に全体の印象がずんぐりして見えていた。

緩慢な動きからはおよそ知性というものを感じなかったが、軽装の鎧をまとい、小ぶりの棍棒を構えている。ある程度の武器や防具を使いこなせるらしい。「トロールです。ガルムより知能が高い分、面倒な相手です」

ウルスの助言を聞きながらも、ヒカリの動きが滞ることはなかった。素手の右腕で突き出される棍棒をたたき落とし、至近距離まで踏み込んで噛みついてくる個体は左肩の防具で受け止める。

押し寄せるトロールの群れを、強引に押し切り突き抜けた。

発動しているクロックアーツのおかげでヒカリにはどのような攻撃も届かない。その特性を利用して、強引に攻撃の嵐を切り抜け体勢を立て直し、レイピアを振るった。

クロノギアの力を得たヒカリの前に、ただのモンスターは意味を持たない。足止めすらできず、カリカがけしかけたモンスターは全滅の憂き目に遭った。

今のヒカリを支えているのは、あの光景だ。

自分達を守って、あの爆発に我が身を晒して消えた仁。いまだに自分が置かれた立場や目の前に突如として現れた非現実的なあれこれを理解したわけではなかったが、父親の仇であるバース4の人間が目の前に現れたとなれば、冷静でいられるはずがなかったのだ。

だがここで《インビンシブル77》の発動から七七秒が経過した。

これまでヒカリの周囲に浮遊し、あらゆる攻撃を防いできた障壁が、粉々に

砕け散る。ここから先、《インビンシブル77》の守りは剥がされ、クロノギアをまとっているとはいえ自分の体を危険にさらすことになる。

それでもヒカリは止まらなかった。

「よくも、よくも父さんをつっ！」

怒声をかけ声代わりにしてヒカリは刺突を繰り返す。

加えて、頭の中で怒りと共にモードを切り替えていた。事前に、ウルからは《インビンシブル77》が停止すれば素早く【シールド】に切り替えるように言われていた。

クロックアーツが切れて危機に陥った時、少しでも危険を減らすために防御を固めるためのモードである。

だがヒカリは、頭の中で赤色のスイッチに切り替えていた。

それは【シールド】ではなく、攻めのために用意されている【アクセル】である。

「ヒカリ！」

それまで大半をヒカリに任せきりにして、自身は数体のモンスターを、明らかに手を抜いて相手取っていたウルが、初めて声を上げた。

苦戦していたわけではない。おそらく先刻の宣言通り、ヒカリがクロノギアの扱いに慣れるため、あえて全力を出していなかったのだろう。

つまり彼女が引きつけていた数は、ヒカリが持てあます分ということか。そんな彼女の声には叱責の色が込められていた。

クロックアーツが切れた後の無防備な状態でいきなり【アクセル】を使用することが危険だということなのだろう。

危険な選択だということにはわかっていた。

それでも自分を抑えられなかったのである。自分にこれほど激しい部分があったとは、ヒカリ自身知らなかった。

ウルの助けは入らない。

ヒカリはクロノギアの扱いに習熟しきっていない。

カリカにしてみれば格好の標的である。だということにカリカは、  
「お、覚えていなさいよっ！」

そう言い残していきなり戦いから離脱したのだ。

彼女の姿がいきなりかき消えた。まるですぐそばに身を隠す場所があったかのように。

戦えば負けていただろう。カリカが何故引き下がるのかがわからない。助かったと思えばいいのか、仇を取れなかったと悔しがればいいのか。

どちらにしても、ヒカリの中には消化不良のモヤモヤが広がっていた。

「あいつ、どこに消えたんだ……?」

「不明です。しかし、あなたは——」

「わかってるよ。自分でも、軽率だったと思ってる」

「だったら自重して下さい」

「だからって、父さんをあんな目に遭わせた奴らを見て、冷静でいられるはず

がないだろう！」

「それでも冷静になつて下さい。それができなければ、死にます」

死という、圧倒的な結末を突きつけられ、さすがにヒカリも言葉を失った。

日常で、冗談や比喩で使うそれではなく、文字通り一歩間違えばこの世から自分という存在が消えてなくなるのだ。

その言葉が軽いはずはなかった。

「先を急ぎましょう」

重い言葉だとわかつてはいても、はいそうですかと簡単に頷くことはできなかった。それを見抜いたように、ウルはそれ以上追及せずそのまま走り出した。

巨大樹と様々な人工の構造物の混成で作り上げられた巨大要塞——バース4のクロノゲートは有機物と無機物のハイブリッドの構造物らしく、どこか神秘的な空気が漂わせていた。

その中で、カリカは居心地の悪い思いをしながら直立不動の姿勢を崩せずにした。

「そう、バース7のクロツカーズは生きていたということね。それはよく知らせてくれました」

目の前に立つブリュンヒルデは、思わず鳥肌が立つような、凄艶な微笑を浮かべまっすぐカリカを見ていた。

自分に向けられた笑みを見て、カリカは何かに似ていると感じる。その感覚を辿っていくと、獲物を前にした毒蛇に似ているのだと思い至り、さらに体を強張らせた。

「それでとつとと逃げ帰ってきたってワケか」

横合いから嘲りを含む声が割り込んできた。

男のように荒々しい言葉遣いだ、その声は女のものだった。

「クロノギアを継承したばかりということ、まだ未熟な状態だったでしょう」  
別の一人が口を挟む。

先の女ほど辛辣ではなかったが、静かな口調の中にやはり非難の色が込められている。

「ならば相手を仕留めるという意味で絶好の機会だっただろうに」

彼女達は契約者——バース4においてはワルキューレと呼ばれ、それぞれが一軍を率いる役目を負っている存在であり、ブリュンヒルデはその筆頭だった。誰もが手柄を立てたがっている中、半人前のカリカが、偶然が重なったとはいえその絶好の機会を得るといふ幸運に浴したことを面白く思っていないらしい。

「す、すみません」

頭を垂れることしかできない。

しかしカリカにはカリカの言い分があった。バース7に攻め込むまで、カリカはバース7の人間達は全員が残忍で冷徹で、優しい心など持ち合わせていないと聞かされていたのだ。

だというのに息子のために命をなげうった仁。

それに、父親の仇を討つために我を忘れて突っかかってきたヒカリの目には怒りが宿っていた。

残忍で、人間性が欠片もない人々の行動ではない。つまりは適当な嘘でいいように操られていたのだ。

そこに気づいてしまった以上、従順なままではいられない。

「逃がしてしまったものは仕方ないでしょう。今から出かけたところで相手はとつくに逃げおおせているでしょうからね」

ブリュンヒルデが諦めに似た調子でこぼす。

「お優しいこったな」

先ほどのワルキューレが茶化すようにそう言った。

「あら、私は誰に対しても優しいでしょう？　いずれにしても、私は一度本国に戻ります。七時の王の生存を報告し、善後策を講じなければ。ヘルファイヨトル、レギンレイヴ、あなた達もついてきなさい」

「クロノゲートはどうするんだよ？」

「スケグル、あなたに任せます」

「あたいと半人前だけしか残らねえのか？　抜け駆けしちゃうかもしれないぜ？」

「七時の王が消えるのなら、いくらでもどうぞ」

「ははん、気前のいいこった。いいぜ、こつちのことはあたいに任せておきな」

自分を取り逃してしまったことも、報告されてしまうのだろうか。カリカは居たたまれなくなっていた。

「カリカ、一度は許します。でも、次は仕留めなさい。それができなければ、あなたにワルキューレとしての存在意義はない」  
言葉はどこまでも静かだった。しかしその鋭さは、まるで心臓にナイフを突き立てられるかのような恐怖をカリカに覚えさせた。

●  
8

それは、まるで何かの映画のCMを見せられているかのように、現実感を欠いた光景だった。

ニューヨークのエンパイア・ステートビル上空に直立する機械式の巨塔。

パリはブローニュの森の中にも、同じように見たことがない様式の要塞が出現している。

さらには、先ほどヒカリ自身が目にした浮遊要塞——クロノゲートが映し出

される。

あの時、直感していた通り、出現した場所は六本木のアークヒルズ上空であるらしかった。

ニューヨークと東京の要塞は超質量を誇っているだろうにもかかわらず宙に浮いている。どのような原理によって支えられているか、ヒカリでは想像すらできなかつた。

「世界中で、同じことが起こっていたのか……」

「ええ、でも厳密には同じではありません」

「え、どこが……?」

同じ映像しか見ていないはずのウルの言葉に、ヒカリは思わず聞き返していた。

「それぞれクロノゲートの構造がまるで違う。ニューヨークに現れたのはバース10のもの。パリに現れたのはバース6のもの。つまり少なくとも三つのバース

スが連合を組んで、このバースに攻め込んできたということだ」

それだけを告げると、ウルは近くにあったソファに腰を下ろし、床に置いた袋の中からミネラルウォーターのペットボトルを取り出して蓋を開けると一口、水を飲んだ。

二人がいるのは大型スーパーの家電売り場である。

いくらクロノギアで身体能力が強化されるとはいえ体力が無限になるわけではない。どこかで休息を取り、体力の補給のため食事をする必要があった。

むろん、ファミレスやファストフード店など、店員が必要な場所は軒並み避難してしまっただけであつたため、二人は仕方なく港区に入ったところで目についたスーパーに入り、食料品売り場から適当な食料を見繕つて来たのである。

普通の災害などなら食料や水は真っ先になくなってしまふだろうが、まだ人が戻ってくるほど状況が落ち着いていないためなのか、食料品売場はほとんど手つかずのまま残されていた。

総菜パンやハムなど、調理しなくてもいいものを選び、自己満足だとは思つたがざっと計算した金額をレジの中に押し込んでおいた。

さすがに走りながら食べるわけにもいかなかったため、どうせ足を止めるならと、テレビかラジオか、何らかの方法で周辺状況の情報が手に入らないかと思ひ家電売場にやって来たのだ。大型のスーパーだったので家電売場は三階にあり、ここなら簡単に敵モンスターに発見されないという目算もあった。

普段なら買い物客で賑わっているはずの店内が、不気味なほど静まりかえっている。まだ照明はついてはいるが、明るいからこそ無人のただっ広い空間は異彩を放っていた。

三つのバースが同時に攻め込んできた。

大変なのはわかるが、そもそもバース4が攻め込んできたという事態が既に理解の埒外にあるため、わけがわからないということに変わりはなかった。

だが、おそらくウルにとってはそうではないのだろう。

相変わらず彼女の表情は読みづらいが、これまでになく深刻そうにしている。会話を切り上げ、水だけを飲んでいいるウルの姿を見てそう感じた。

仕方なくヒカリはテレビに視線を戻す。

相変わらずバース4なのか、バース10なのか、いずれにしても異界の軍勢が暴れ回っている姿が映し出される。

迎え撃つ側も、黙って見ているわけではない。どちらも世界有数の大都市である。そのど真ん中で戦闘用ヘリコプターが飛び交い軍事行動を起こしていた。銃撃の様子や爆炎なども散発的に写り込んでいる。

一般の人達が行き交う街中を、交差点を、広場を、兵士達が駆け抜けていく。相手が不条理なモンスターであるということを除けば、まるで戦争映画の光景その物なのだ。

戦況は一方的だった。

自動小銃や戦闘ヘリから放たれる機関砲の弾丸は不可視の壁に阻まれ、逆に

モンスター達の攻撃は一方的に兵士達を蹴散らしていく。

そんな中、異彩を放っていたのはパリである。他の地域が激しい戦闘状態に陥っているのに対し、パリは不気味なほど静まりかえっているのだ。

ニュースキヤスターが興奮気味にまくし立てているだけで、敵の勢力は展開されておらず、フランスの軍隊も刺激することを恐れたのか要塞を包囲して状況を見守っているようだった。

勢いだけで走り続けていたヒカリは、休息を取ることと少し冷静になった今、これからどうするべきか答えを出せずにいた。

何より、

(そうだ、そもそも、母さんはまだニューヨークにいるのか!?)

仁と共に渡米していた母親の神名絵里沙がどこにいるのか、仁は何も言っていないかった。ウルは母親とも知り合いなのだろうかとヒカリは横顔を窺う。

彼女は相変わらず、人形のように無機質な顔つきで、テレビ画面を凝視した

ままだった。何を考えているのかわからない。

「あなた達、何をしているの!？」

テレビの音だけが流れる気まずい沈黙の中、鋭い声が割り込んできた。ヒカリとウルは反射的に立ち上がって身構える。

視線の先に現れたのは、完全防備の消防隊員であった。

「あなたは……?？」

それも独特なオレンジのつなぎを着ているところを見ると、通常の消防隊員より高度な技能を身につけたレスキュー隊員のようだ。

しかも、声からすると女性らしい。過酷な現場に飛び込むことが多いレスキュー隊員は、なかなか女性を採用しないと聞いたことがあったので意外に思えた。

「私は巽芽衣。ハイパーレスキューの隊員よ。このあたりに逃げ遅れた民間人がいないかどうか、見て回っているの。どうしてこんな所にいるのよ！」

芽衣は信じられないとばかり、非難めいた声を出す。

「僕達は……」

咄嗟に説明しようとして、ろくに説明できないことに気づく。ウルはそもそも現れた芽衣との対話を放棄しているようだ。

一向に口を開かない不審者にたまりかねたのか、彼女はヒカリの腕を取って引っ張った。

「とにかく、ここは危険なの。現在、東京都全域に非常事態宣言が出されているわ！」

「非常事態宣言……?」

「そう！ 謎の侵略者に対して、自衛隊が出動して防衛行動に出てる。普通は市民の財産や人命を傷つけることは許されないけれど、今は交戦区域への被害は仕方のないものとして黙認されるの。つまり、こんな所にいたら、戦闘に巻き込まれるってことよ！」

「わ、わかりました」

半分気圧されつつも、相手が詳しい説明を諦めた気配を感じて安心する。あとはこの場をやり過ごしてまた移動すればいい。

そう考えたところで、ウルがヒカリの肩を掴んだ。

「え?」

「敵が来ます」

「こんなところに!」

「彼女が連れてきたようです」

ウルは鋭い視線で芽衣を指さした。

「わ、私が、なに?」

一人、事情が飲み込めず、聞き返す相手に詳しく説明するより先に、それはこの場に現れた。

ミシミシと、非常階段の欄干をへし曲げながら、防火扉をぶち抜いて巨体が

家電売場に現れる。

フロアの入りに口に置いてあった組み立て式の家具が押しつけられ、派手な音を立てて床に崩れ落ちた。

「ひっ!？」

現れたモンスターを見て芽衣が息を呑む。

ヒカリの持つ知識の中で一番近い姿を持った生き物を挙げるとするならば、鳥のオウムだろうか。

オウムであれば美しいと表現するところである。だが目の前に現れたソレに對しては「醜悪」という表現以外、当てはめるべき言葉を思いつかなかった。

何しろ、体長は三m近くにまで及ぶ、巨大な怪鳥なのだ。頭部の半分近い大きさを占める分厚く頑丈そうなクチバシなど、人の頭蓋骨ぐらいなら簡単に噛み砕けてしまいそうだった。

ガラムといい、トロールといい、バース4はどれだけ多種多様な兵を用意し

ているのだろうと、改めてヒカリは敵対している存在の大きさを思い知る。

「そんな、こんなところにまで入り込んでくるなんて！」

芽衣は信じられないと声を上げた。

「ここが危ないと言ったのはそっちでしょう」

ウルが冷静に指摘する。

「そ、そうじゃない！ 私は人命検索で上がってきたけれど、そこを追いかけられたら危ないのなんてわかってる！ だから隊の仲間が下で見張って、異変があつたら無線機で——」

知らせてくれる手はずだったのだろう。

だがそれを説明するより先に、目の前のモンスターが動き出した。

「きゃあっ!?」

芽衣が悲鳴を上げて体を強張らせる。おそらく相対していたものが災害であったなら、彼女は怯まなかつただろう。しかし、今この状況では適切な行動が

とれるはずもない。

だが、人間の体の大きさに合わせて作られた天井や通路はモンスターには狭すぎる。外とは違い、跳び上がることはできず、展示された商品や棚が引つかかって動きを邪魔する。

そんな不完全な突進であつたからか、完全に冷静さを失つていながらも、芽衣は陳列された棚ごと津波のようになって襲いかかってくるモンスターの攻撃を回避していた。

「君！ とにかく逃げなさい！」

最初の攻撃をどうにか凌いだ芽衣は、自分のことを後回しにしてこちらの心配をしてくれる。おそらく彼女としてこの状況を理解しているわけではない。

それでも守るべき人間のことを優先させられるのは、彼女は根っからの消防士だからなのだろう。

「下がっていてください」

しかしヒカリは彼女の言葉とは逆に前に出ると、クロノギアを展開してモンスターの前に立ちふさがった。

「き、君！ 君は一体……」

武装したヒカリの姿を見て芽衣は驚きの声を出す。

「ウル、この人のことを頼む」

無言のまま頷くウルを目の端で確認してヒカリは動き出した。

おそらく、このモンスターは本能のまま追いかけてきたのだろう。でなければ動きの邪魔になるほど狭い場所に入り込んできたのは不自然だ。

だが多少動きが不自由になろうとも、生身の人間にとってみれば体格差だけで致命的である。ヒカリが普通の人間であったなら。

わずかながら休息を取ったおかげでクロックアーツも回復している。今のヒカリにとって、動きが制限されたモンスターなど、ものの数ではなかった。

左右に動くにしても相手がどう動くか確認してからでも悠々間に合う。絶対

的な確信を持って、ヒカリはモンスターを退治して見せた。

●  
9

現れたモンスターを仕留めた後、ヒカリとウルはほとんど何の説明もせずに芽衣の腕を引っ張って強引にその建物からの離脱を試みた。

家電や家具が売られているのは三階。

当然、下のフロアにも複数のモンスターが入り込んでいるかもしれない。数体程度であれば、むしろヒカリ達の脅威とはなり得ない。

ならば何故急ぐのかと言えば、芽衣の言葉が気かりだったからだ。

「そんな——」

階段を降りてすぐ、芽衣は絶句した。

悪い方に、ヒカリの想像は当たってしまったのだ。

芽衣は、シヨツピングセンターの入り口で仲間が見張っていると聞いていた。人命検索をするというなら、こんな広い施設に入ったのが芽衣一人であるはずはない。

異変が生じればすぐに無線で連絡が入る手はずになっていたというのなら、それが入らない状況に陥ったということである。

三階から二階に降りてすぐ、ヒカリの鼻は異質な臭気を感じ取った。濃密な、血の臭いである。

階段には複数の人影があった。誰もがレスキュー隊として芽衣と同じ装備に身を包んでいる。

だが芽衣とは違い、誰一人として息をしていない。

かくん、と膝から力が抜け、芽衣は床に座り込んだ。

「どう、して……、どうして……」

目の前に横たわるかつて仲間だった物体。

それを見た彼女の気持ちは、想像することしかできなかったが、これが今の東京——のみならず、世界中で起こっている悲劇なのだろう。

「どうして、どうして……」

芽衣はうわごとのように繰り返す。

死人のように青ざめた顔をヒカリに向けて、芽衣は「何故」と繰り返す。だがその言葉の意味は、ヒカリが想像しているものとは違っていた。

「どうして、あなたには戦う力があるの！」

そんなことを聞かれるとは思っていなかったヒカリは答えあぐねる。

「いきなりこんなとんでもない事件が起こって、誰も、みんな抵抗もできずに、同僚も上司も、要救助者もみんな、みんないたぶられて殺されていった！ 私、何もできない！ できなかつた！」

彼女の目に宿っていたのは悲しみだけでなく怒り。

理不尽な状況に対する怒りが炎のように迸っていた。おそらくここに来るま

でも同じように自分の無力を思い知らされる出来事を見てきたのだろう。

「一つだけ、あなたの言葉に対する答えを用意することができません」

そこで口を開いたのはウルだった。

「詳しいことは省きますが、彼はクロツカーズ。見ての通り、戦う力を持った数少ない人間。その力を分け与えることができるかとするなら？」

「できるの!？」

芽衣は縋るような眼差しをウルに向ける。

確か、クロノゲートを目指すことになった際にも、ウルはそのようなことを言っていた。移動の連続で詳しい話はまだ聞けていなかったが……。

「クロツカーズは、彼に付き従い彼を守る従者たる契約者をつくることができ。力を得れば、あなたは元の生活には戻れないかもしれない。それでも——」  
「構わない！」

芽衣は即答していた。

「今のまま、ただ蹂躪されることしかできないのは耐えられない。この街の人達を守るのなら、私は何だってやってやる！」

芽衣の宣言を受けて、ウルは一つ頷くとヒカリに向き直った。

「聞いての通り、彼女は契約を望んでいる」

「一体、どういうつもりなのさ？」

問われて答えた形だが、明らかに不必要な人間を巻き込もうとしているウルに疑問を感じる。

「私は、このままクロノゲートに攻め込みます。その際、少しでも戦力が増えれば、それだけこのバース7を救う確率が上がるということです」

ウルが言う、普通の生活に戻れないというのがどういう意味かはわからない。ウル的口ぶりだと彼女を利用するために煽っているようにも聞こえるので躊躇いもある。

ただ、ウルやブリュンヒルデの力が契約によってもたらされているというの

なら、この危険な街のただ中に、彼女一人を放り出すよりはいいような気がした。

「でも、契約なんてどうやれば……」

「クロノギアに意識を集中して下さい」

「あ、ああ……」

装備を展開させず、左手首にまいた腕時計に触れる。

すると、これまでは気がつかなかった感触に気づく。体に続く腕、腕の先の指。自分の体に神経が通っているのをたどるかのように、腕時計の先に何かがある——物理的ではないどこかの何かにつながっているような気がするのだ。

(これは……)

目を閉じてさらに集中する。

どこか遠いところだった。

目蓋を閉じ、真っ暗になった視界の底に何かを感じる。遠い遠い、どこか寂

しい場所に、クロノギアの力の源泉が眠っている。

「これか……」

ヒカリがその存在を実感すると同時に、向こうの方でもヒカリに気づいたのか何か力の塊のようなものが漂ってくる。

「芽衣、ヒカリの前に跪いて頭を垂れなさい」

「あ、は、はい」

ウルと芽衣のやり取りを聞いて目を開けると、芽衣が言われた通りの格好で目を閉じ控えていた。

まるでファンタジー映画で叙勲を受ける騎士のようだ。

「ヒカリ、彼女の肩に触れてこう宣言して下さい——」

ようだ、ではなくどうやら王の従者として認める儀式そのものようだ。

あまりにも仰々しいやり取りに多少の躊躇いを覚えながら、ヒカリは腕時計をはめた側の手——左手で芽衣の右肩に触れ、ウルから聞かされた通りの言葉

を紡ぐ。

——我、天翔ける金色なりし一二の座

我が名において、汝を眷属とす

我が力は汝が器に、汝が命は我が剣に

この場、この時より、互いの命尽きるまで

我は汝を見捨てず、汝は我を欺かぬ

これ、すなわち誓約なり——

ヒカリが言葉を紡いだ途端、どこからか来た力の塊が、ヒカリの腕を通じて芽衣に降りていく。

「これで、契約……？」

「そうです。扱い方は、実戦で学んで下さい」

「実戦……？」

「ええ、まずはこの地域のモンスターを排除します」

芽衣は頷き、立ち上がる。